「キレイ」を求めて

桂菊菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「キレイ」を求めて

【Ｎコード】
Ｎ６３７１Ｃ

【作者名】
桂菊菊

【あらすじ】
彼の名前は「日光誠」。１５歳の、進学校に通う超エリート中学生だった！ある日、彼は勉強づけの生活や、自分よりも、成績や家の名誉が大事な親などを「汚らわしい」と思いはじめていた。そして、ついに！誠はこの「汚らわしい」家からオサラバすべく、家出をしてしまったのだ！どこに行く当てもなく、どこに行くかも決めず・・・しかし！それが新たな出会いのきっかけになろうとは！？

第一話：「汚らわしいもの」（前書き）

どうも。桂　菊菊といいます。こんな下手くそでよければ、読んでいただけたら幸いです。

第一話：「汚らわしいもの」

・・・・・・汚らわしかった。
・・・・・・汚らわしかった。
何が何であろうが、オレの周りは汚れていたのだ。
こんな汚らわしい物は、嫌と言わない奴はこの世から去るがいい。
しかしオレに罪がないわけじゃない。
オレは、こんな周りに妥協し、迎合した。
オレのほうがよほど汚らわしい。
だから、どんな汚らわしい手を使ってでも、
「キレイ」を手に入れようとした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

オレは今、東京の街を・・・・どこかもわからないまま、さまよっていた。リュックサック一つしょっただけで、ただ、さまよっていた。

どこか、住む場所が欲しい。しかし、どこにもない。日本はおろか、世界中探してもオレの住みかはみつかるまい・・・・・自分の家？いや・・・・そこには戻れない。戻りたくもないし、何より、オレが戻るのを待つ人は一人もない。そもそも、待つ人は、『オレが消してしまったのだから』。

オレの名前は「日光（にっこう）　誠（まこと）」。神戸に住んでいた、15歳だ。オレを含めて3人のオレの家族は、ただ一つをのぞき、別にほかの家族とはなんら変わりなかった。ただ一つ・・・そう、ただ一つだ。代々学者ということもあってか、オレの家はとにかく教育熱心だった。父親も、母親も。

生まれた頃から、絵を見せては「これは？」と、いわせるようなこともしていたらしい。幼稚園ぐらいになると、ひらがな、カタカナ、足し算や引き算もやらされた。具体的にどんな訓練だったか覚えてはないが、しくじったりする度に、
「なんでこんなんができひんねや」
といわれては殴られていた記憶は残っている。
こうして小学校に入学する頃には九九は完全にマスターしている、というレベルにまでオレの頭は特化された。少なくとも、神戸全域の小学一年生の中で、オレを越える奴はいなかったと断言してやってもいい。
それでも、両親は貪欲にオレに知識を与え続けた。どれくらいのハイレベルな知識だったかは覚えてはないが、それでも、間違えたり、とくのに時間がかかっていたりしたら殴られていたことは覚えている。
いろいろ忘れるのに殴られたときだけは鮮明に覚えている。
小３の塾のテストの時、ほんのはずみでクラス最下位ととってしまった時、両親には正直に見せて謝った。その後、口が切れるほど殴られて、３日間朝夕抜きにされた。
学校のテストで、いつもはどれもこれも１００点を取っていたのに、ある日記述の微妙なミスで９７点だった。正直に見せたら、あほう。なんで１００点ないんや。お前の友達の山本くん９９やったろ。下流層に負けてどうるすんや、と言った。
オレは・・・周りが全て「汚れている」と感じ始めたのはこの頃だった。

第一話：「汚らわしいもの」（後書き）

と、いうわけで、これからもよろしくお願いします。。

第二話：「『キレイ』になりたい」（前書き）

続きです。数話先のアイデアを練りまくってので遅れました。読んで下さってる人もたくさんいみたいで、嬉しいです。引き続きご愛読なさってくれれば光栄です。

第二話：「『キレイ』になりたい」

・・・・・・この頃だった。
・・・・・・この頃だった。
「汚れている」と感じ始めたのはこの頃だった。
賢いオレには暴力を振るった。
「バカな」下流層はボロクソにけなした。
政治家みたいなおっさんに金を渡して何か頼んでいた。
金と栄誉を何よりも死守した。
そんな両親にうんざりしたオレは
とうとうある決心をすることとなる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

発端は夏休み前のある日。オレは自分の部屋で帰ってきた期末試験のやり直しをやっていた。すると父親が入ってきて、
「またゲームしとるんか」
そのことばにカチンときたオレは、
「勉強だよ、試験のやり直し！見ればわかるだろ！」
と反駁した。しかし、こう父親は言い捨てたのだ。
「よう言う。あんなクソみたいな成績とってようぃうわ。」
・・・何も言い返せなかった。悪かったのは事実だ。全教科が平均点を上回っていなければいけないのだが、オレはそれができなかった。無論、殴られた。
「ええか、全部平均とれんなら0点も同然なんや。全教科合計0点！下流層はそんなんでも満足する器の浅いクズどもや。少なくともそんなんに負けるような男はこの日光家にはいらんからな。このハ

クチ息子が。」
「ハクチ・・・・ッッ・・・・」
その差別用語にまたしてもカチンとくる。そして決定打の一言。
「こんなに貶されたり殴られんのは、誠、おまえ自身のせいや。一人で何とかしろや。自己責任や。やないと下流層に堕ちるで。」
と、言った後、父親はダァホ、と吐きながら、まるで恨みをこめたようにきつくドアを閉めた。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
一時間くらいは沈黙していた。というより全く動かずにあることを考えていた。
「『日光家にはいらん』か・・・・・・・」
そういえば今まで、血を分けた親とは思えないほど数々の暴力を受けた。父も母もオレの学力と名誉と金くらいしか関心はない。決してオレ自身に関心があるわけではない。その証拠に、いつか風邪をひいたときも、
「はよ勉強せんか」
と言っていた。
テストで一番や好成績をとっても、
「そうか」
で終わる。
オレはもう必要とされていない。
出て行くべきなのか。
・・・・・・・いや
考えてみれば、オレは必要とされていない、というわけでもない。
そもそもオレはこの家、家庭を「汚れている」と感じていた。
「汚れている」
そうだ。「汚れている」んだ。
オレはこの「汚れている」家に住んで、汚れた親に勉強を強要され、

そのうち、
「居場所がなくなってしまったんだ」
いやもしかしたら
「存在が虚無に限りなく近くなった」
そしてそんな全てが汚れている環境に甘んじた自分もまた、「汚れている」。
じゃあ・・・・・・どうすればいいのだろうか。
そんなことを思いふけながら、もう夜中になっていた。
いや、もうどうしようもない。オレは本棚から、マンガを一冊とった。もちろん親が収集を許すはずないのでこっそり隠してあるのだ。
うつろな眼でパラパラめくっていると、うっかりそれを落としてしまった。
ダン！バサッッ・・・・
一瞬びっくりしたが、すぐに手に取り、もう寝ようと思い、元にしまおうとした。その時・・・思い出した。
あのセリフ・・・
『こんなに貶されたり殴られんのは、誠、おまえ自身のせいや。一人で何とかしろや。自己責任や。やないと下流層に堕ちるで。』
・・・・・・なるほど。
・・・・・なるほど。
オレのせいじゃないか。
オレ自身のせいじゃないか。
さっきも思っていたが、甘んじていたオレも「汚れている」。
「汚れている」から抜け出したい・・・・
「キレイ」になりたい。
オレ自身が・・・自分の力で・・・
「キレイ」になれば・・・・

そして、次の日の夜。
オレは「キレイ」を探しに行くことにした。

第二話：「『キレイ』になりたい」（後書き）

まだ連載は続きますんで。是非お楽しみ頂けたらと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6371c/

「キレイ」を求めて

2011年1月13日08時37分発行